

大津の芭蕉

俳人の松尾芭蕉（1644～1694）は大津を頻繁に訪れました。現在では俳句で最も有名な人物で、江戸の文壇で名を馳せた後、書き方教師をしながら、時間がある時に俳句を詠んでいました。しかし、都会の生活に満足することはなく、名声の絶頂期には日本を放浪し、旅先からインスピレーションを得た散文や俳句を書くようになりました。

芭蕉の時代には、大津は江戸と京都を結ぶ東海道の京都手前の終点であり、遍歴歌人が最終的にそこにたどり着いたとしても不思議ではありません。大津の人里離れた寺院や伝統的な町並みは、芭蕉の琴線に触れたようであり、多くの俳句の題材となっている。大津とその周辺の地を題材にした俳句を 89 首詠んでおり、それは彼が公表した作品の 10%を占めています。

芭蕉は頻繁に大津に戻ったので、門下生たちは市内中心市街の北側にある堅田に住み始めました。芭蕉は近くの浮御堂に泊まり、この「浮御堂」や南にそびえ立つ唐崎神社の松を詠んでいます。この2つの場所は、近江国（現在の滋賀県）の伝統的な景観である「近江八景」の一部として、木版画家たちによって不滅のものとされています。大津で芭蕉ゆかりの地としてもう一つ注目すべきは、岩間寺です。そこにある鯉の池が彼の最も有名な俳句の一つの題材になったと考えられています：「古池や蛙飛び込む水の音」。庭の大きな石には、俳句をモチーフにしたプレートが貼られています。

芭蕉は大津をこよなく愛していたので、最後の願いはその街に葬られることでした。大阪での死後、友人や教え子たちは遺体を琵琶湖に向けて川を上りました。お墓は大津市中心部の義仲寺にあります。